

—— 第3章 ——

ニュータウンの人口の急増

### 3.1 震災前後のニュータウンの人口

震災後、仮設住宅の大量建設や、分譲住宅の建設、個人の住宅への親戚や知人の被災者の受け入れなどで、西神ニュータウンの人口は急増する。

まず全市的な人口動向をみると、震災までは緩やかな人口増加を続け、震災直前は1,519,000人であっ

たが、震災後は1,423,782人までに激減している。平成12年には震災直前とほぼ同じ149万人となり、その後震災以前の人口に回復した。

これを区毎にみると、被災を受けた既成市街地の人口は減少しているのに関わらず、北区と西区では人口が増加している。これは、開発中の住宅地があったために、神戸市からの人口の流出がこの程度に抑えることが出来たことになる。

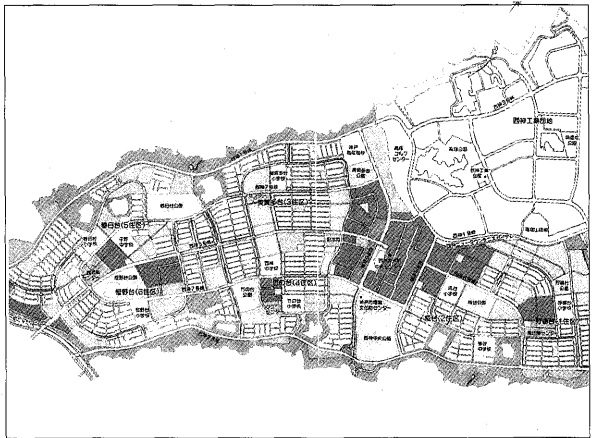


図9 西神中央

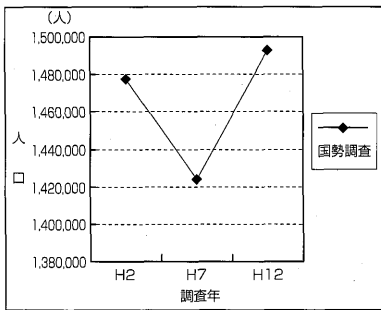


図10 全市・各区の人口動態

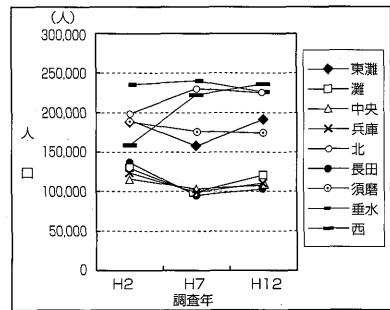


図11 西区と西神ニュータウン人口の推移

これを西神ニュータウンでみると、平成2年は32,571人であったが、平成12年には86,297人となり、西神ニュータウンの人口増が激しいことがわかる。西区の中で西神ニュータウンの人口比はどんどん増加し、平成12年の国勢調査時で、すでに区の三分の一を占めるまでになった。更に市が開発した神戸電鉄沿線的美穂が丘、月が丘、を含めると、区の人口の40%が市の開発した住宅地である。

これを町丁別で更に詳しくみると、仮設がある町丁とそうでない町丁では大きな差がある。そこで、ちょうど震災の年の10月に行われた国勢調査の結果から、震災前後の人口動態を比較した。

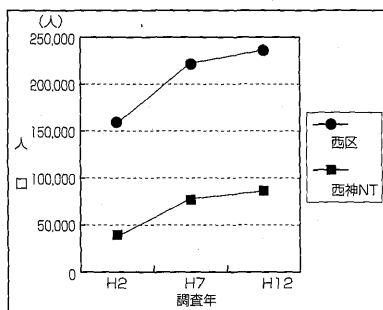


図12 西区におけるニュータウンの人口推移

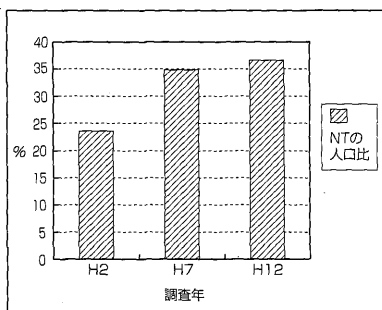


図13 西区におけるニュータウンの人口比率

### 3.2 仮設住宅による人口増加

平成7年12月末の仮設住宅の入居率、平均世帯人数がわかっているので、平成7年の国勢調査に基づいて、西神ニュータウンの仮設住宅入居者数を推計したのが表6 (P25)である。そこで、住宅建設が完了し人口定着が進んでいた糀台の全ての町丁について、人口動態を比較した。この中には、ニュータウンの隣接する町に加算しているものが2カ所あったので実情に合わせた。

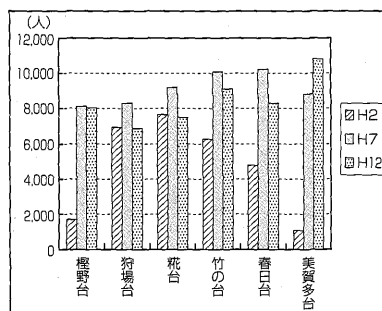


図14 西神中央・町別・人口動向

図15は、糀台全体の10年間の人口動態である。平成2年の国勢調査では、7,654人であったが、平成7年には9,198人に急増し、平成12年には7,487人にまた減少している。震災のあった平成7年を除いて平成2年から12年までを見ると、緩やかに人口が減少していることがわかる。

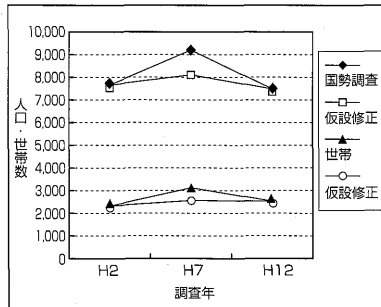


図15 糀台・人口・世帯数・動向

表7 糀台・丁別仮設住宅入居者

糀台・丁名	仮設住宅名 住 所	建設 戸数	入居率 (西神)%	平 均 世帯人数	推定入居 人 数	推 定 世帯数
1丁目	西神第4(櫛谷町 池谷公有地)	137	92.12	2.0	252	126
2丁目		0			0	0
3丁目	糀台第1(糀台公園)	130			238	119
	糀台第2	77			142	71
4丁目		0			0	0
5丁目	西神中央(西神中央公園)	250			460	230
計		594			1,092	546

平成2年から平成7年までの人口増1,544人の内訳を推計したのが、表8である。これは糀台をまとめて見たもので、丁毎にかなり事情が異なるので更に詳しく見てみよう。

表 8 平成 7 年・人口増の推計内訳

	増加人数	備 考
仮設住宅入居者数	1,092	入居率・世帯人数から推計
医療センター宿舎	222	平成 7 年までに新設
マンションの新築	約 200	閉園した幼稚園の跡地
その他 (自然増減・社会増減)	約 30	
計	1,544	

糀台 1 丁目は、典型的な 1 戸建ての分譲住宅地で、一斉に入居した比較的小さな地区である。平成 7 年、震災の年の春に、外周道路の外側の空き地に、西神第 4 仮設住宅 137 戸が建設された。所在地は、櫛谷町池谷公有地となっているが、国勢調査ではこの町に加算されている。平成 2 年から 7 年を比較すると、仮設住宅の推定入居者数 252 人を加えても増加数 188 人で、差し引き 64 人の自然減になっている。この傾向は平成 12 年に続き、10 年間で 71 人減少している。一方、世帯数は平成 2 年の 127 世帯が平成 12 年には、126 世帯と 1 世帯の減になっているが、ほとんど移動が無い。

糀台 3 丁目には地区公園があり、ここに、糀台第 1 (130) 第 2 (77) 計 203 戸の仮設住宅が建設されている。ここでは、平成 2 年から 7 年にかけて 420 人増加しているが、仮設の推定人口 380 人を修正してもなお 40 人の増加があった。この 40 人は、自然増か、社会増か、または仮設の推定人口の誤差かは詳らかではない。

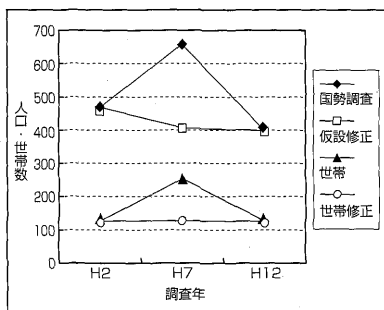


図 16 糀台 1・人口・世帯数動向

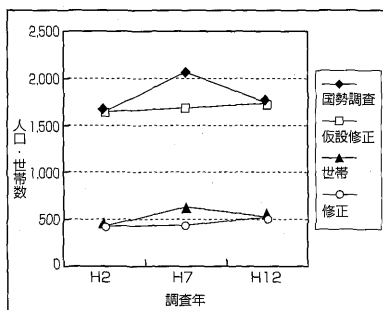


図 17 糀台 3・人口・世帯数動向

平成9年4月に、閉園した幼稚園の跡地に77戸のマンションが建ち、戸数増となったが、10年間を通してみると、マンションの建設を考慮しても89人の人口増にとどまっている。

次は、糞台4丁目である。この町丁は1戸建てとマンション街区とからなっているが、仮設住宅はない。平成2年から7年までの人口は横ばいであるが、12年には急落している。しかし、世帯数はあまり大きな動きは見られないので、他の町丁のような世帯あたりの人員減のように見られる。しかし、この町丁にはかなりの数の社宅がある。西神ニュータウン

は我国初の職住近接のニュータウンを目指していたので、工業団地のための社宅が多い。しかし会社経営でも、持つより借りるへの変化で、社宅の廃止が相次いでいる。ちょうど買い戻し特約期限の10年を過ぎる頃から、社宅のマンション化が進み、多様な住宅が混わるこの町では、人口の変化の分析に不確定な要素が多くなってきた。

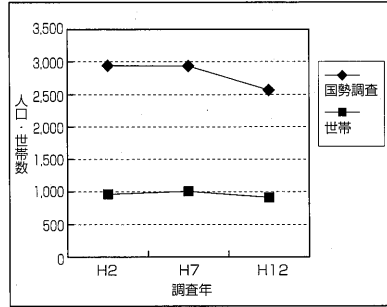


図18 糞台4・人口世帯数動向

糞台5丁目は近隣商業地区で、本来居住者はいなかったが、西神戸医療センターの医師と看護師の寄宿舎が完成し、震災後に、近くの西神中央公園に仮設住宅が250戸建設され、国勢調査時にこの町にカウントされている。

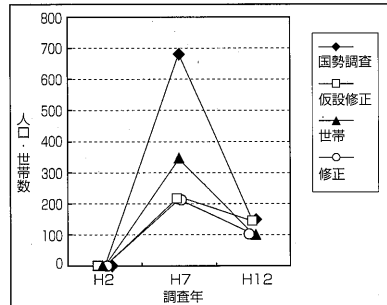


図19 糞台5・人口世帯数動向

最後に糞台2丁目の人口の動きを見てみよう。この町丁には仮設住宅

はなく、一戸建て住宅地と大きなマンションからなっている。その割合は、一戸建て275戸に対してマンションは644戸、計919戸で、一戸建て30%に対して、マンションが70%と圧倒的にマンションの影響が大きい。一戸建て

は高齢化が進むが、マンションは比較的若年者も多く、駅に近いので住み替えも多いと思われる。

そこで、この町の人口を、自然増（減）と社会増（減）について考察しよう。平成2年から7年までの人口増は、266人である。これを、年齢別人口からみると、平成2年から7年までの5年間に、0歳から4歳までの人口は207人が増加している。いわゆる出生による自然増である。差の59人は、社会増減と死亡者の差し引きとなるが、死亡者数はわからないので、正確には社会増は59人以上である。

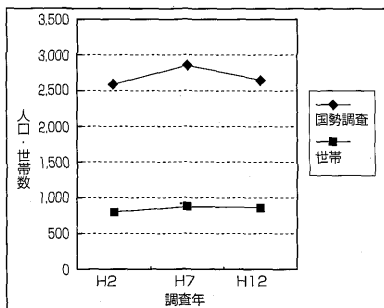


図20 糀台2丁目・人口・世帯数動向

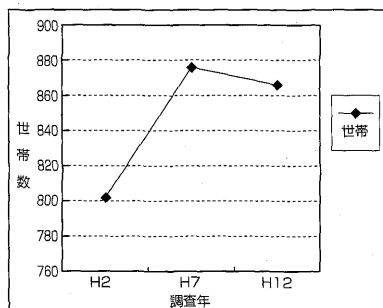


図21 糀台2・世帯数動向

図22は、平成2年、7年、12年の年齢別人口のグラフである。団塊の世代のように同世代が一斉に入居し、その後転居などの異動がないとすると、この3つのグラフは、右へ平行移動するはずである。しかしこのグラフでは、明らかに平行移動していない。これをみると、0～4歳児が大幅に減少し、その親に当たる30歳から39歳までが同じく大幅に減少し、また高齢者が増加していることがわかる。これは震災の影響がどうかはわからないが、若年世帯の減少傾向は今後大きな問題となるおそれがある。

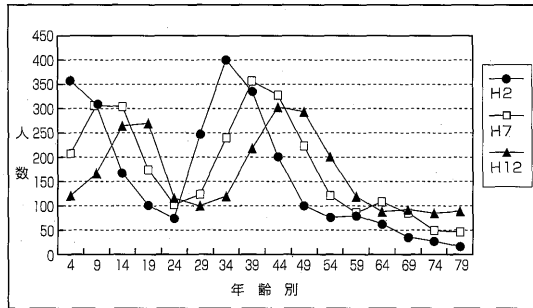


図22 調査年毎糞台2丁目・年齢別人口

このように、震災の年に2,859人まで増加した人口は、平成12年には2,647人と、212人減少している。しかし、世帯数は他の丁では増えているのに、この丁ではかえって減っている。

また、この町の男女別人口の推移をみると、10年間で明らかに女性が増加し、男女間のバランスが崩れている。これは、男性に対して女性の平均年齢が高いことを考慮すると、高齢者が増加していることを反映していると思われる。

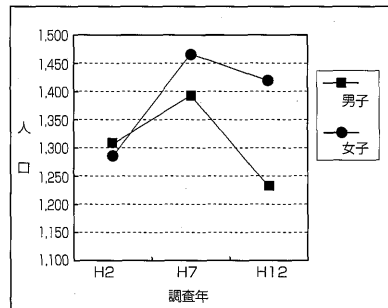


図23 糞台2・男女別・人口推移

今回は、国勢調査をメインにしなから分析したが、被災者の受け入れの調査でないため厳密さに欠けるが、国勢調査は、「当住居に、三ヶ月以上にわたって住んでいるか、住むことになっているもの」を対象にしているため、平成7年10月には、かなりの被災者がこのニュータウンでひと時を過ごしたことと思われる。

注・少子高齢化と西神ニュータウン 大海一雄



### 3.3 仮設住宅以外の人口増加

前節では、糶台について人口の動きをすこし詳しく見てきたが、その目的は震災後に、仮設住宅による人口の増加と、それ以外にも人口の増加があったことを数字で知るためであった。そこで、西神中央の仮設住宅がなかった11丁について、震災直前の平成6年12月から平成7年の10月までの人口の推移を見たのが図24である。これによると、震災があった1月から人口が増え始め、3月がピークとなっている。4月になると減少しているのは、仮設住宅の入居が始まった頃と一致している。国勢調査があった10月にはすでにピークが過ぎていたことがわかった。

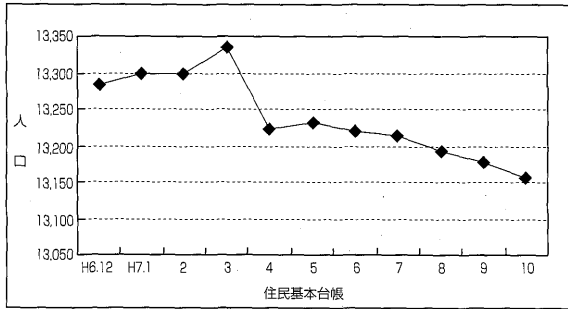


図24 仮設のない丁の人口移動

復興公営住宅のコミュニティ調査によると、被災当初の住まいは、親戚や知人宅が案外多く26%にのぼっている。一般的には、避難所から仮設住宅、それから復興公営住宅と直線的に住み代わったように言われているがそうではない。復興公営住宅の入居者の調査によると、震災後6ヵ月後でも親類9.1%、友人等1.6%、計10.7%が親類や友人宅などに住んでいたことになる。この外、持ち家層も自宅を再建するまでの間、親戚の家に同居した例も多い。西神ニュータウンでも、多くの家庭が、被災者の受け入れを行っていたが、具体的に数字で証明するものがなかった。

### 3.4 被災地からの住み替え

平成8年実施の「全世帯アンケート」で「震災の前と異なる住宅に住んでおられる方」で「あなたのお住まいは、現在どのような状態ですか」の設問に対して、「別の場所に新築または購入して住んでいる」人は、回答総数27,188世帯のうち、16.9%である。これを西神ニュータウンでみると、回答世帯は1,704世帯で、32.1%の人が、「別の場所に新築または購入して住んでいる」と回答している。

西神ニュータウンの「別の場所に新築または購入して住んでいる」回答世帯数は546世帯となるが、回答率の28.4%を考慮して大胆に、新築か購入の戸数を推定すると1,925戸となる。これらの世帯は、震災約一年後に西神ニュータウンに新築するか、新築マンションや、中古住宅を購入して転入したものと思われる。

被災者で持ち家取得層には、災害特別融資制度があり、神戸市住宅供給公社では、平成7年2月から平成11年8月までに2,609件の利用者があり、その内訳は、新築1,124、高齢11、中古44、改修1,430となっている。

これを具体的に西神ニュータウンの分譲団地でみると、かなりの利用者があったことがわかる。融資を受けた人達は、すべてが被災者で融資制度とあいまってニュータウンが持ち家層の新しい居住地となった。

表9 神戸市住宅供給公社 被災の特別融資を受けた人の例

団地	入居	戸数	融資なし	融資適用者	適用者%
西神64	H 7. 3	60	35	25	41
西神南4	H 8. 3	61	11	50	82
学園20	H 8. 6	43	11	32	74
西神65	H 9. 3	40	20	20	50
小計		204	77	127	62

このように、西神ニュータウンは開発途上であり、豊富な開発用地があったために、仮設住宅の建設、復興公営住宅の建設や分譲住宅で、神戸市の住まいの復興に大きな役割を果たした。

表10 「震災後に住居を移した人」全世帯アンケートから推計 回収率28.4%

	回答世帯数	別の場所に新築または購入して住んでいる(%)	実数	推定世帯数 100/28.4=3.52
西神ニュータウン	1,704	32.1	546	1,925
研究学園都市	380	33.7	128	450
ニュータウン計	2,084	32.3	674	2,375
西区計	4,369	27.2	1,188	4,183
市内計	27,188	16.9	4,594	16,173

### 3.5 人口増の影響

この臨時の人口増は、ニュータウンを活気付け、各方面に影響があった。震災直後は、復興支援の人達のためにホテルはフル稼働し、商業施設の売上は急増した。地下鉄の乗降人員は開業以来の最高を記録し、また仮設住宅を巡る臨時のバスルートを開設した。

仮設住宅が建設された頃は、市街地は解体撤去が進行中で、人々はマスクが標準装備となっていた。しかし、ひとたびトンネルを抜けてニュータウンへくると、今までの神戸の町がそのまま残り、被災した人たちをホットさせた。

しかし、このつかの間の“繁栄”も、やがて仮設の撤去と共に落ち着き、数字的にも震災前に戻っていった。しかしその間、西神ニュータウンは神戸の副都心としての役目を充分果たした。

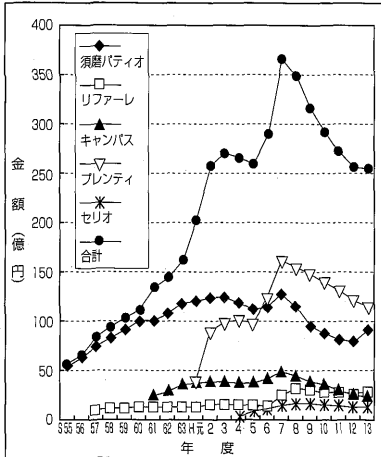


図25 ニュータウン開発センターの売上高推移  
注・会社概要/㈱神戸ニュータウン開発センター

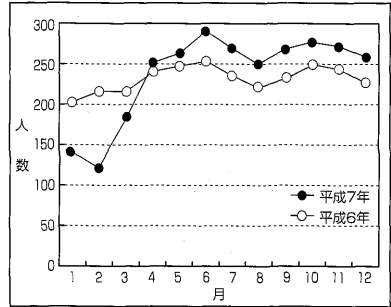


図26 地下鉄乗降客の推移  
注・阪神・淡路大震災・神戸復興誌

### 3.6 工業団地の躍進

震災後初の工業統計調査結果（平成7年）は、「平成8年度3・神戸市統計報告」に発表された。これによると、全市の工業統計の諸数値は、震災前の平成5年に比し大幅に減少している。同報告書によると「区別には、須磨、長田、中央区が震災の影響を大きく受け、製造品出荷額等は大幅に落ち込んだ。西区には他区から移転してきた工場もあり、神戸ハイテクパークや西神インダストリアルパークが飛躍的な伸びをみせている。」と解説している。

これを数字でみると、平成7年は、両工業団地共に、従業員や工業出荷額は大幅に増加している。これは、両工業団地共に地元の関連企業も多く、被災した工場の従業員を配置転換し、生産も西神にシフトしたものである。また、仮設工場も建設されているのでこの効果も表れているものと思われる。その後は、サイエンスパーク（SP）は元に戻るが、インダストリアルパーク（IP）は、震災の影響とは別の要素が働いたと思われるが、製造品出荷額が増大し従業員も増加傾向した。

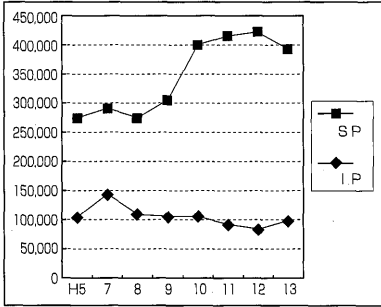


図27 S P、I P工業出荷額

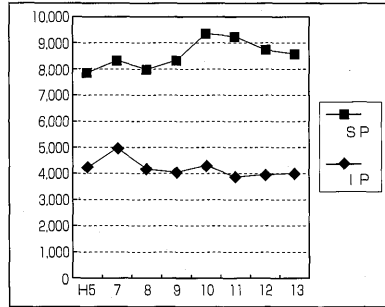


図28 S P、I P 従業員

(工業統計は、全事業所と4人以上の事業所の統計があるが、事業所の数は当然異なってくるが、工業出荷額はあまり大きな差が無いのでそのまま使用した。)

注・工業団地・位置図 西神ニュータウンの見所30選の地図参照

## &lt;手記7&gt;

**震災地からの住み替え**

垂水区塩屋町の海岸近くの傾斜地にあった築62年の2階建て木造家屋が全壊となり、ニュータウンの学園都市に移り住むまでの個人的な苦労話を思いつくまま次に記すことにする。

前夜遅く旅先から帰宅したため、地震の朝は未だ半分くらい眠っていて、ベッドの窓側の台の上から読みかけの本が頭上に落下して飛び起きた。瞬間的に大地震と覚悟して、大きな揺れが止むと直ちに着替えて階段を駆け下りた。階下の家内は無事であったが、食堂の小型テレビや食器棚などが倒壊して壊れたガラス類がところ構わず散乱していた。

危険なのでスリッパを履いて階上、階下を見てまわると、内側の壁が2ヶ所と小さい窓ガラス数枚が破損しているくらいで表と裏の戸口の開閉に支障ないので大したことないように思って庭と木戸の外に出ると屋根瓦がほぼ全部落下し、ブロック塀の一部が道の方に倒れていた。屋根瓦の修繕が不完全であったと悔やまれるが仕方なし。なお、室内と庭で放し飼いにしていた小型犬がおろおろして摺り寄ってきた。

近隣の状況を見てみると、玄関側の狭い道に幅10センチ強の亀裂が入り筋向いの家の真中あたりを貫いている。更に、ガスの漏れる臭いが漂っていた。元栓が直ぐに止められたようで火災にならず胸をなで下ろした。

これらの様子から大阪の勤務先への出社は諦めて電話するが通じないので公衆電話に並んで勤務先にやっと連絡できた。また、市内中央区のマンションに居住する娘にも電話連絡して無事を確認した。

屋根に上がると浮きあがった状態の瓦が多数まだ残っていて危険なので慎重に庭に投げ落した。倒壊して落下したブロックと一緒に庭の隅のほうに山積みして片づけた。また、数日のうちに雨の降る予報が告げられているため、加古川の妹に連絡して屋根用のビニールシートを届けてもらうことにした。

電気・水道・ガスは地震直後から止っていたが、電気は17日夜9時半くらいに復旧した。無傷で残ったテレビが長田区と兵庫区など旧市街の無残

---

に壊れた建物の火災を中継放送しており、その取材ヘリコプターの騒音が終夜つづいて眠れない夜となった。ただし、比較的新しい住宅街の塩屋町では完全倒壊の屋根や火災はなく、散発する余震が気懸かりになるが切迫する身の危険を感じなくてすんだ。この程度なら未だましな方と思い、亡くなったり避難所にいかれた方々に同情する余裕もあった。

翌18日から25日まで勤務は休んで屋根にビニールシートを掛けたり、壊れた窓に段ボールを貼るなどの応急処置に追われた。また、断水の5日間は坂道の下の方まで給水車の水を貰いに行き運び上げるのが大仕事であった。6日後に水道から水が出た時は水の有難さがよくわかった。炊事にはニクロム線式電熱器や携帯用プロパンガスコンロを利用した。ガス風呂のため、家の風呂に入れず、車が通れるようになってから「しあわせの村」の無料開放の風呂に数回通って英気を養った。震災1ヶ月後に漸くガスも復旧してほぼ元の生活を取り戻せることになった。

旧い木造家屋であるが柱や外壁などしっかりしており当座の暮らしには問題ないものの、2月9日付で全壊の「り災証明書」の出た家なので、家内と二人の転居先を見つけなければならなかった。

3月に入ると、知り合いの不動産屋O氏に協力を頼んで震災被害のない西区につき検討を始めた。鉄道駅に近くと思っていたので、地下鉄の運動公園～西神中央の駅に近い物件を当った。先ず、学園東町の供給公社の新築分譲住宅に応募したが抽選もれとなり、次いで西神南の小規模マンションの空家に入るべく手続きを始めた。しかし、マンション自治会規則でペット入居不可となっていて愛犬のためここを断念した。

その後は適当なものが見つからなかったが、6月に学園都市駅近く（学園西町2丁目）で築10年余の庭付きの家の情報が不動産屋O氏より齎された。早速、家内と見に行き気に入ったので価格交渉に入った。

以前いたところは昭和7年に建った古い家なので敷地測量と敷地図面制作が必要と思いあらかじめ近隣の測量事務所に手配して隣接する家々の協力も確認した図面が完成していた。庭が広くて割合と大きい敷地であったので転居予定の家の買取額に問題ないとみて、不動産屋O氏とともに敷地売却と学園都市の家の買取りを並行して急ぎ進めることにした。

素人工事で屋根にビニールシートを掛けるなどの仮住居なので台風シーズン前の8月中旬迄に転居できるよう敷地転売先を併せて探しまわった。

---

---

敷地購入者は県内で見つからず、7月に大阪市在住者が漸く買ってくれる見通しとなった。直ちに敷地売却と住宅買取りの夫々の相手と仲介者を交えた交渉に入り、8月初めに売却と買取りの契約がまとまり、8月30日までに売買双方の決済が完了した。

購入した家は4人家族が住んで居られたが傷んだところはなかった。それでも台所・風呂・便所の水まわり設備（ユニット）は9月初めの6日間の突貫工事で更新して9月7日に引っ越すことができた。幸い台風の襲来もなく多忙であったが達成感を味わえた。

小生はちょうど8月末で40年勤めた会社を退職した。大阪への通勤でJR不通区間を代替バスを乗継いだのも過去の思い出となった。当地・学園西町2丁目の住民となり、周辺の整備された遊歩道や広い公園に恵まれ、犬とゆったりした気分で散歩できるのを特に喜んでいる。

(岩谷 忠男)



## <手記 8 >

### 私の震災10年

---

#### 1. そのとき私は

闇の中で突然激しい上下動、ついで横揺れが始まった。地震だと私は別室にいた妻と長男の名を呼び叫んだ。ガラス戸のついた重い書棚、タンス、テレビが次々に倒れた、「建物がつぶれる」そう思った。1995年1月17日未明の須磨離宮前のわが家でのことだ。幸いマンションの倒壊はまぬがれたが、強い余震が絶え間なくある。

近くに住む義父母の家は焼失はしなかったが、完全に壊れた。その日からわが家は年寄り夫婦と同居の被災生活が始まった。

地震の当日マンションの3階から見た光景を一生忘れないだろう。爆撃を受けたかのように市街地の至る所で黒煙や炎が上がっていた。「終のすみか」と決めてる大好きな「ミナト街神戸はどうなるのだろうか。」と悲しい思いがした。

#### 2. 被災者として

被災生活をしながら感じたことは、80代の年寄りには仮設住宅の生活は大変だろうと、しばらく親と一緒に住んで親孝行の真似事でもするかと同居生活をスタートさせたが、水、電気、ガスのない不便な生活は、年寄りにはきびしく、一方家庭内ではもめごとが増える日々が続き、申し訳ないことをしたと思っている。

しかし震災で家や物を失ったが、金で買えない親子の絆が深まったことに感謝している。

また私自身は被災者であり不自由な生活を余儀なくされているが、一方会社の責任者としての仕事をかかえている。行政の方の当時の苦労とは比較にならないが、家族の安全と仕事をこなさなければならない状況で、危機管理マニュアルにないことが次々とおこり、走りながら考え、決断していかなければならないという貴重な体験をした。

---

---

被災生活の中で強く感じたことは、震災について地域での温度差です。私の住まいは神戸、職場は大阪（本社東京）、上京したり大阪で震災体験をいくら話しても「大変ですね。」「頑張ってください。」と思いやる心はみんな持ってはいるが、心の傷までは同じ深さでないことに寂しさをおぼえた。

### 3. 被災地よりニュータウンに移り住んで

私は一昨年被災地須磨から、ニュータウンに移り住んでいる。被災地は現在多くの人達のお陰で日に日に復旧復興はしてきているが、心にうけた傷をとり去ることはむつかしいように思う。ニュータウンに住んで感じたことは、ここは震災を知らないかのように、のどかな田園風景がひろがっており、「ミナト街神戸のイメージ」とは一味違う地域のようなのだ。

震災当時、神戸市内でも被災地とそれ以外の地域とでは、震災に対する温度差があるといわれていた。今回、当研究会で「震災とニュータウン」というテーマに取組み、ニュータウンが震災直後から仮設住宅の建設、その後の復興住宅への建設につながり、また当時被災地から多くの方が移り住み、そのまま残っていらっしゃることなど、ニュータウンが震災から大きなかわりをもって来たことを学び、既成市街地の住民としての認識不足を反省している。

現在、復興住宅には高齢者が多いことや、コミュニティの成熟などの課題をかかえるニュータウン特有の問題があるように聞いている。これからはニュータウンの住民として震災体験の風化が進むなかで、震災を知らない子ども達やこれから災害が予想される地域の人々に対し、震災体験から学んだ教訓と、命の尊さ、人と人との絆の大切さについて発信していきたいと思っている。

(高見 俊明)